

七月の終りに書いた原稿は、蕪村の「岩倉の狂女恋せよほととぎす」の句を、句として、つまり文字表現の面から読み解いてみたものです。すでに画との関連で勉強して来たわれわれには、逆にこうしてもういっぺん文字表現としての俳句の解釈を掘り下げてみると、さらにこの句の味わいが面白くなってくるのではないでしょうか。これを材料に、もっといろいろな解釈やイメージをみなさんが開拓して下さいを願っています。

夏休み明けの最初の〈土曜の午後のABC〉は、こんな原稿をお配りするところから始めますが、その冒頭に引用しました蕪村の言葉「二重ふたえにききつを付ける」に注目したいと思います。以下、メモふうにな。

これまで勉強してきたところから、蕪村が自分の仕事について宣言のような（すべて個人的に誰かに告げるといふスタイルをとった）言葉を噛み締めてきました。それを整理すると、

一、離俗りぞくの俗ぞく

二、俳諧物之草画はいかいものそうが

三、二重ふたえにききつを付ける

です。「不用意」というのも大切なのですが、これは、この三つのいずれにも通じる底流のような心構えのことで、さきの三つは、方法論と呼んでもいいものです。

これまでの蕪村論や蕪村解釈を読んでいると、二は「俳画」だけの方法の問題、三は「発句、俳句」の問題というふうに限定して解釈するのが主流ですが、僕は、この三つは、俳諧、絵画いづれにも通じかつ重要な方法論として（つまりは人間いかに生きるかの哲学的な方法論として）蕪村は肝に銘じていた、と考えたいと思っております。（そう理解したとき、これらの言葉がぐっと身近に近づいて来るし、蕪村の作品が生き生きと観えて来ます。俳句における「二重のきき」は『八雁やかり』に書いた原稿でいちおう整理できました。

次の課題は、では絵画ではどうか、です。これも、じつはずっと始めから、蕪村のこの言葉を出さないけれども、その絵を「二重」に「多義的」に読める面白さを楽しんできたことなので、けっして珍しくはないので。

ところで、この三つの方法論。蕪村が自覚的に言葉にするのは、彼が京都に住むようになって何年か経ってからです。長い修業というか日々の勉強、読書と思索、句作、画稿制作のなかから言葉となる思想が形を成して行きました。

蕪村の生涯をもういちど整理しておきましょう。

生まれは、1716（享保元年^{きょうほうねん}）。誕生日や、家族のことはよく判っていません。

1735（享保二十年）よりのち、つまり二十歳以降に江戸へ出る。

1737（元文二年^{げんぶんねん}）早野巴人（夜半亭宋阿）の内弟子になる。二十二歳。

1742（寛保二年）巴人没。結城、下館方面を放浪。二十七歳。

1751（宝暦元年^{ほうれきねん}）八月。京へ。三十六歳。

1754（宝暦四年）夏頃、丹後へ。三十九歳。

1757（宝暦七年）九月、京へ戻る。四十二歳。

1766（明和元年^{めいわねん}）九月、讃岐へ。五十一歳。

1768（明和五年）四月、京に戻る。五十五歳。京に住んで十六年。

亡くなったのは、1783（天明三年^{てんめいねん}）1784年1月18日）十二月廿五日。享年六十八歳。

とは言え、この三つの宣言。言葉になる前は、作品に生きていないと言うのではありません。

次の初期の作品を眺めてそれを確認したいと思います。

図版はネットですぐ検索できるのでそちらからよろしく。作品データだけを次に。

蕪村初期の「山水画」（宝暦十年作）

各六曲一双屏風。紙本淡彩。一四四・〇×三九・五 cm

右隻「倣王叔明山水」京都国立博物館蔵。

款 庚辰 杪冬 望 宝暦十年 師走、冬を待ち望む頃

東成謝長庚 東成与謝の長庚

醉中偶摸得 たまたま 偶酔いに任せて

王叔明漫画 王叔明（王蒙）の漫画の法を

法 模て得た一作

酒々一日跡 一日でささつと描いた味もあれば

板々数月功 何ヶ月もかけて出来上がる味もある☆

印 「春星」「謝長庚印」「三菓主人」いずれも白文方印

左隻「倣米南宮山水」ロサンゼルス・カウンティミュージアム蔵

印 「囊道」（朱印法印）「東成」（白文法印）

王叔明（王蒙 1308～85）元末四大家の一人。

米南宮（米芾 1051～1107）北宋時代の書画家。

☆ 唐の時代、呉道玄と李思訓に皇帝玄宗が山水画を依頼、

呉道玄は一日で仕上げ、李思訓は数ヶ月をかけて呈上したが、

いずれも劣らぬ名品であったという故事（歴代名画記）を詠む。